

社会医療ニュース

社会医療研究所

〒114-0001
 東京都北区東十条3-3-1-220号室
 電話 (03) 3914-5565 (代)
 FAX (03) 3914-5576
 定価年間 6,000円
 月刊 15日発行
 振込銀行 リソナ銀行
 王子支店 1326433
 振替口座 00160-6-100092
 発行人 岡田 玲一郎

DRGが発症後90日までに 拡大、試行されていくときに

所長 岡田 玲一郎

今年もアメリカに行つて来た。絶対に飽きないから、主として同じ病院に行く。一見さんお断わりはないけれど、何回も行く中に手の内を晒してくるのが、人情というものだ。そして、日米共に、医療が問題なのではなく医療費が問題であることを痛感してきた。

DRGがPACにまで 拡大して発症から90日に

PACとはポスト・アキユート・ケアで急性期後のケアであることは、ご存じだと思ふ。そして、DRGは疾病別の固定費払いに適用されることも、本紙の読者ならご承知のことだろう。それが、急性期後のケア、つまり長期急性期医療や入院リハビリ医療、ときには外来リハビリや在宅ケアまでカバーされることが政府から出されてきた。2〜3の疾病で来年から試行が始まるそうだ。エライコッチャ。疾病ごとの包括払い額に変化が

あることはあるのだが、短期急性期病院は5%ぐらいの減収になることが予想されている。その一方で、自院は2%ぐらいの減収だと明言されたCEOもおられ（日本で2回講演した医師）、経営者のこれまでの経営手腕が問われているのである。

発症から90日という、短期急性期病院の平均在院日数は5日弱だから、約85日分の急性期後のさまざまなケアのコストの償還に充当するお金を短期急性期病院は残してPAC施設の収入を保証しなければならぬ。その減収分が2%とか5%というわけだ。

もし、結果として短期急性期病院がDRGの支払い分を取ってしまったら、PAC側は「しゃぶりがす」の患者を受け入れることになる。そんなことは厳しく律せられるだろうが、いままで「コスト償還方式」だった長期急性期病院はDRGの「包括払い」の額の中

でコストをカバーしなければならなくなる。おそらく、DRGの支払い額は増えることになるだろうと思つているが、入院リハビリ施設（IRF）や在宅ケアには大きな変化（発症後90日）をもたらさそう。それは、老人医療が対象であるメデイケアの話である。ただし、アメリカの病院関係者（前出のCEOなど）は、それが老人対象のDRGではなく、民間の生命保険会社の支払いシステムにも採り入れられるのは必至で、その対応をいまから始めていた。

厚労省はけしからんと 言つたつて経営はよくならない

先のCEOの「いまから対応していかなければ」の対応とは、なんだと思われませんか。日本からの参加者が「人員削減」と言われたら、即座に「いろんな意見はあるが、要するに医療の質を向上させなければ対応できないので、職員を削減することはしない」と言われた。わたしは、心の中で喝采していた。♪いつものように、幕が開き♪じゃないよ。

職員を減らしたりギリギリの定

員にしたら、医療の質は絶対に下がる。現場に身を置かれたら、実感することである。飲み屋だつて、職員が少なくなつたら客が減るのだ。そが、製造業とサービス業の決定的なちがひなのである。

多数精鋭主義は、今年の診療報酬でも見事に開花した。わたしがいつも研修のとき言う「医師は多いほどいいんじゃない、看護師も多ければ多いほどいいんじゃない、ギリギリの員数でいい医療ができる？」と問うときの反応は、現場では多数精鋭主義の経営を求めているということだ。

それを、アメリカの病院のCEOも主張するのである。収入の減少を人員削減でカバーしようとしても、ますますの収入減につながることは日米を問わず常識なのである。人を減らして器械を導入して、患者さんや利用者は満足するだろうか。先日新聞の経済欄に「オムツ交換ロボット」が作られたことが報じられていたが、それを導入したら収入や利益が増えるのだろうか、思つてしまった。

日本でDPCが発症90日後までに拡大されたら、必ず、厚労省けしからん論が出る。そりゃあ不満があるんだから言つてもよいけれど、急性期病院に限らず慢性期病院や回復期リハビリ病院もアメリカの病院のCEOの言うように「医療の質の向上」をするしかない、わたしは思う。また、今年

の診療報酬改定も「質の向上」の一点に尽きるのではなからうか。小山秀夫さんがわたしを評して「質の向上一点張り」とおっしゃっていたが、それしかないと思つている。

だつて、国民（患者）は単に医療を買っているのではなく、医療の質を求めて買っているではないか。むろん、別の頁に書くことになるだろうが、その医療の質の向上の重要な視点はコンプライアンスの悪い（低い）患者の矯正という教育にあることは、アメリカにもモノの分らないわがまま患者がいる、ということだ。そこに発症後90日までのDRGという意味があると思つた。

日本は、コンプライアンスの悪い患者でも診療報酬に入ってくるが、DRGではそうはいかないのだ。そして日本でも、患者の教育指導は意欲のある病院では実践されてきており、そのスピードも上がってきている。日本では、患者は自分に投じられた医療費の3割を負担しているだけなのに高いとか、採血で何回も刺されたとか文句を言うが、七割は国民がお互いに負担しているのである。

このところを理解している患者さんが多い病院が勝利することは、世の中の慣いだわたしは思う。患者さんの質の向上も、病院にとつて重要になつてきたのである。それを実践するか否かだ。

組織医療としての病院 (297)

最後の晩餐

新須磨病院
院長 澤田勝寛

「ホント美味しい、とろけるよ
うよ。柔らかいお肉ね。嬉しいわ。
最後の晩餐ね」

「と言つて、彼女は小さくきつたヒ
レ肉を一切れずつ、ゆっくりと口
に運んだ。ほんの数切れであった
が、美味しそうに食べている。」

日曜の昼さがり、書類や雑誌や
本で散らかった院長室で、二人で
ステーキを味わった。

彼女は、明治生まれの94歳。
私が関係する有料老人ホームへ、
平成7年の阪神淡路大震災後に入
居してきた。

東京で育ち、関東大震災も経験
したという。厳格な陸軍将校の父
に反抗し、若くして家を飛び出し、
津田塾でフランス語を学び、フラ
ンス語の翻訳家として、80歳ま
で仕事をしていた。天涯孤独を自
称しており、確かに訪れる人はい
なかつた。

「スパイのことをフランス語で
は、エスピオナージっていうのよ。
私なんか、戦時中は特高につけら
れたこともあるのだから」と、話
していた。フランス留学の経験も
ある。戦時中なら、敵国かぶれの
怪しい女性とおもわれても仕方な
い。イブニングドレスを着て、パ
ーティーにもよく出ていたという。

(297)

最後の晩餐

新須磨病院
院長 澤田勝寛

ついこの間まで、薄化粧をし、口
紅を引き、ネックレスとイヤリン
グで飾り、つばの広い洒落た帽子
をかぶつて、颯爽と歩いていた。
背筋が伸びて細身ですらつとし、
ドレスアップした彼女は、どう見
ても90歳を過ぎた老女には見え
ない。ひよつとして魔女ではない
かという、楽しい噂も流れていた。
私も、彼女がホウキにまたがって
空を飛ぶ姿を想像したことがある。

「年寄りが野菜ばかり食べていた
ら、よけい年寄りくさくなっちゃ
うでしょう。私はね、ステーキと
お寿司が好きなの」

「今まで私は病気がらしい病気なん
てしたことないのよ」

「病気になったときはそのときよ。
先生、何もしないで薬にさせてね」
ときおり、健康診断に訪れたとき
の彼女の口癖であつた。

半年前から、食事がすすまなく
なり、徐々に痩せてきた。老人ホ
ームの友人や職員が、病院の受診
をすすめても、「いいの、いいの」
と言つて、拒んでいた。しかし、
やはり気になつたのか、久しぶり
に健康診断を受け、進行した胃が
んが見つかった。すでに狭窄症状
も出現していた。

彼女に、病気のことを包み隠さ

ず説明した。彼女は、淡々とした
態度で、笑みを浮かべながら、
「そうだろうと思つていたのよ。
よく分かりました。ところで、後
どれくらい生きられるかしら」

「何年も、というわけにはいきま
せんね」
「薬で治らないかしら」
「それほど効く薬はありません」
「最後は痛むかしら」

「多少の痛みは出るでしょうが、
そのときは麻薬を使いましょう」
「ここまで生きたのだから、もう
十分。先生、何もしないで最後は
楽に死なせてね」

「わかりました」
始終にこやかに、彼女はリビング
ウイルを表明した。

とはいつても、内心は穏やかな
らぬものがあつたようである。病
状が進行するにつれ、些細なこと
でもホームの職員に厳しい叱責を
するようになった。今までの彼女
では考えられないことである。

しばらくすると、副作用の少な
い抗がん剤治療を希望してきた。
できるだけ希望に沿うように対応
したが、徐々に病状は進行した。

お腹が張り痛がつているとの連
絡をうけた。久しぶりに、彼女の
部屋を訪れると、待つていたかの
ように、
「先生、ひどいわね。どうして来
てくれなかつたのよ」といつにな
く、険しい表情で責められた。
「よくがんばりましたね。そんな

お腹では苦しいでしょう。病院に
入院して、腹水だけでも抜きまし
よう」と言うと、彼女はあつさり
と同意し、入院した。

緊満したお腹に針をさすと、淡
血性の腹水が流れ出した。大量の
腹水が抜け、お腹はベシヤンコに
なった。平らになつたお腹には、
多数の腫瘍が触知され、癌がかな
り進行していることが分かった。

病院嫌いの彼女に、退院を勧めた
ところ、
「迷惑でなければ、このまま最
期まで入院させておいてちょうだ
い」と懇願された。癌の終末を迎
える場所として、家とくらべ何が
しかの制約があるが、安心が得ら
れるということ、病院を選択し
たのであろう。

粥を少量食べるのみで、目に見
えて衰弱がすすんだ。病室には、
スタミナドリンクや飴やラムネ菓
子が置いてあり、私が部屋を訪れ
るたびに、どうぞ召し上がれとい
つて、すすめてくれた。

ある日、
「先生、最期に美味しいステーキ
が食べたいわね」と半分冗談、半
分本気で言われた。

「家で焼いて持つてきましょうか」
とたずねると、
「冷えたステーキなんてだめよ。
ステーキは焼きたてでなくっちゃ、
美味しくないもの」
「そうですね、でもなかなか難し
いですね」と言いつつも、ある考

えが浮かんでいた。
その夜、家で相談、電磁調理器
を持つていつて焼いてはどうかと
いうことになった。商店街の肉屋
で、上等のヒレ肉を買い、日曜日
を待った。病院のどこで焼こうか
と迷った。病室では匂いが病棟に
広がるので、まずいと判断し、私
の部屋で焼くことにした。

彼女に予告はしていなかつた。
日曜の昼前に病院に行き、散らか
つた机の上を片付け、電磁調理器
をセットして病棟に電話、院長室
に連れてきてもらうように頼んだ。
しばらくして、車椅子に乗つて彼
女がやつてきた。

パジャマの上に着用を羽織り、
やつれを隠すように、ひさしの付
いた二ツトの帽子をやや深めにか
ぶつていた。ここにいたつても、
女性としての恥じらいを持ち、身
だしなみに気を遣つていた。

さし向かいで、焼きたての小さ
なヒレ肉にスパイスをかけて一緒
に食べた。これが、彼女にとつて
は「最期の晩餐」であつた。

「先生、人生なんて無で虚ね。何
にもなくなつちゃう。虚しいもの
ね。でも、最期にこんなに美味し
いお肉を食べることができて、本
当に嬉しい」と言つて、両手で私
の手を強く握りしめてきた。肉の
煙が目にしみた。

そして、それから3週間後、彼
女は94年の波乱に満ちた長い生
涯を閉じた。

そして、それから3週間後、彼
女は94年の波乱に満ちた長い生
涯を閉じた。

6月17日、NHKテレビは小澤征爾が1月に指揮したモーツァルトの「ハフナー交響曲」とハイドン「チェロ協奏曲」を放送した。ホールはかれと吉田秀和さんが作った水戸芸術館、演奏は手兵の水戸室内管弦楽団である。

おとしの冬、かれはがんで食道の全摘手術を受けた。その後も治療を続けながら持病の腰痛とも闘ってきたが、ときに演奏会が中止になったり、1楽章だけで指揮を後進にまかせたりし、ファンはその体調に気をもんでいる。

手術後、主治医と並んでの記者会見では、「がんはキレイに取っていた。もうキャンサーフリーです」と笑顔で語っていたが、今、映像で見ると「14キロ痩せた」顔も体も元にもどってはいない。(ほくも術後16キロ減ったが、いまだにそのままだ)

痩せた顔が、トレードマークのボサボサ髪とあいまって、ときにハツとするような鬼気迫る風貌を見せる。楽章の切れ目には傍らの椅子に腰を下ろして一息つき、また指揮を続けるのは、渾身の身振り強いまなざしで精神的に楽員に意思を伝える指揮に慣れた目にとっては痛々しい。この公演のあとは当分休養というが残念である。

ギターを背負い日の丸をつけたバイクの24歳の若者が1959年、ブザンソンの国際指揮者コンク

ルで優勝、世界的に注目される。才能を見抜いたバーンスタインは、かれをNYフィルの副指揮者に抜擢、日本公演に同行した。若き「マエストロ・オザワ」誕生だ。かれと面談したことが数度ある。62年、27歳のオザワはNHK交響楽団の指揮者に就任する。理事長で音楽界の大ボス有馬大五郎さんが口説き落としたのである。当時NHK広報室で報道担当だった31歳のぼくは、その記者会見を仕切ることになった。会場は内幸町にあったNHK新館の大会議室。オザワさんは新婚のピアノ

言を期待して100名もの放送・音楽記者が集まったが、かれは一言も批判を口にせず、去った。その潔さに、立ち会ってもらった有馬さんの流された涙は忘れ難い。この事件はオザワに、エリート意識とヒエラルキーで固まった日本の音楽界に見切りをつけさせた点でよかったのだ。かれは欧米で数多のオーケストラを振り、ベルリンフィル定期やウィーンフィルとザルツブルグ音楽祭も指揮した。ミュンシュのあとを継いだ名門ポストン響監督は30年の記録をたて、2002年には指揮者として

歳でロストロポーヴツ国際コンクールで優勝を勝ちとった宮田大青年である。かれがオザワとまなざしを合わせながら弾いていた年期の入ったチェロは、なんと斎藤秀雄の愛器なのだ。若いオザワに斎藤秀雄は合理的な音楽文法を叩き込み、吉田秀和はその美しさと深さに気づかせ、バーンスタインは人心の掌握術で大きい影響を与えたというのが定評である。ぼくはそれにかれの持つ「経営感覚」を加えたい。この稿を書く

しつ、死ぬまで「帝王」の座に君臨したかれをオザワは「カラヤン先生」と呼ぶ。かれが水戸芸術館を建てて楽団を育て、「サイトウキネン・オーケストラ」を組織して世界的な名声を確立した手腕はカラヤン譲りといつてよいであろう。

「オザワ」とその師たち

北林才知

(277回)

スト江戸京子さんと現れ、「N響に新しい風を」とよどみなく語った。

しかし、半年もたたぬうちにかれはN響を去ることになる。原因は大半が芸大(や前身の東京音楽学校)出の楽員が、名もない桐朋音楽短大などという学校を出た若造を見くびり、小さな「振りミス」をネタにイビったことだという。

彼らは暮れの演奏会をボイコットし、オザワがひとり東京文化会館のステージに立ちつくした。退任の会見にはN響への罵詈雑

最高のポストであるウィーン国立歌劇場の音楽監督に駆けのぼった。

桐朋音大はN響の首席チェリストをつとめ、世界的にも知られた指揮のメソッドを確立した斎藤秀雄と、音楽批評を芸術の域にまで高めた吉田秀和が始めた「子供のための音楽教室」が母胎である。オザワはこの二人から音楽の基礎を教え込まれた。とくに指揮法については斎藤に徹底的にしぼられた。

話は戻るが、冒頭の演奏会でハイドンを弾いたのは3年まえ、22

ので20年ぶりにカール・ヴィーゲランドの『コンサートは始まる』を読み直してそう思った。

このドキュメントはポストンの首席トランペット奏者シュレイターとオザワの息づまる確執を軸に書かれている。音楽監督は「自分の音楽」を実現するためには、場合によっては気に入らない楽員をクビにする冷徹な経営者でもあるのだ。かれは経営者としてのこの感覚と行動を、カラヤンから学んだに違いない。あのベルリンのホールを作り、演奏と演奏者にはわがままを通し、ときに強権を発動

もうひとりの師匠・吉田秀和さんは5月に98歳で亡くなった。鋭く、しかし詩情ゆたかな文章で音楽評論を芸術の域にまで高め、文化勲章も受けた。バルバラ夫人を9年まえに亡くし、一時は自分がどこにいるのかわからないほどの虚脱に陥ったが、立ち直って書いた自伝的エッセイ『永遠の故郷』4部が遺作となった。その中に吉田さんが訳したシユトラウス『夕暮れをゆく夢』の歌詞がある。

マエストロ・オザワ、あなたがウィーンフィルと感動的な名演を残してくれたマーラーの交響曲第2番「復活」のように、がんを克服し、ふたたび円熟の音楽を聴かせてくれる日の早いことを祈る。

今年も半ばを過ぎて七月となり
ました。

七月の七は、洋の東西を問わず
「聖」なる数として考えられて来
ました。

ですが、日々の暮らしになじん
で一体となった存在です。

例えば、旧約聖書の創世記に神
が六日間で天地を創造し、七日目
を安息日として聖なる日と定めま
したが、今は、七日目を安息日と
感じているひとは少ないと想われ
ます。

身近な例で云えば、毎日目にす
るカレンダーは恐らく本来の七日

元氣澆刺な施設づくりをめざして

「銀河鉄道の夜」に想いをはせて

ヘルスケア経営研究所 萩原輝久

目（安息日）が週の開始日なつて
いるかと思えます。

安息日が週の初めに「存在」す
るのはちよつと変なのですが、も
う生活の一部に溶け込みすぎてい
て、違和感を持つひとは少ないと
想います。

また、月の運行（天体が軌道上
を運動すること）は、七日ごとに、
その姿が変って行きます。

例えば、真っ黒な新月、スリム
な形の三日月（殆ど月の形も見え
ない新月から細い月の姿が三日
目）が七日たつと半月形の上弦の
月で、それから七日たつと満月、

さらに七日たつと下弦の月、また
七日たつと新月。

この変わりゆく月の姿、七日を
暦の単位としたことが「お七夜」
オシチヤ、生後七日目のお祝い、
その一方で「初七日」、「四十九日」、
「七福神」、「七賢人」、さらには、
北斗七星、等々。

そうそう大事な七を。
七月七日は七夕で、七が重なり
合った日。

牽牛（けんぎゅう）星と、織女
（しよくじよ）星が天の川を渡つ
て、一年に一度だけ会うことを許
された日。

でも、今年の七月七日もですが、
例年そのほとんどが梅雨空なので、
天の川をみるのがかないません。
その訳（わけ）は、今は新暦と
変わっているからとのこと。

もともとは、旧暦（太陰太陽暦）
の七月七日は、今の新暦でいうと
七月下旬か八月の時機。

つまり、昔（明治六年までの旧
暦）は、梅雨が明けた天候の良い
時季で、天空も明るすぎず暗すぎ
ずの上弦の月。

ですから天の川も観やすかった
のではないか。
その太陰太陽暦、つまりかつて

の七夕（七月七日）にもつとも近
い日を『伝統的七夕』というのだ
そうですが、今年は八月二十四日
だと国立天文台が伝えてくれてお
ります。

二十四節気、処暑にもつとも近
い新月から七日目に夜空を見上げ
てごろんなさいと粋な計らいが嬉
しいです。

ところで、梅雨ももう直に明け
てくれると想います。

今年も、局地的な豪雨、意地悪
を超えた虐（イジ）め雨が襲いか
かりました。

本来は、ほどよく物を潤おし育
てる雨。慈雨が一番望ましい雨か
と想います。

でも、それは勝手な願い事にな
るのかも。

慈雨というのは、ひでりつづき
の日の望まれた雨、その有り難さ
があつてのことかも。

例えば、ところが折れる・折れ
そうな他者の気持ちを判るのは、
ところが折れたことやおれそうな
ことが何度も在った体験があつて、
他者の気持ちを自身のこととして
映せるのだと。

ときどきですが、向き合えるこ
と・寄り添えることつてどう云う
ことなのだろうかなあうつて想う
ことがあります。

遠い或る日、何かしてあげなけ
ればならないこと、何かしてあげ
ること、そのことが向き合うつて
ことなんだと想い込んでいたので

すが、何もしてあげることが出来
ないけれど、見守つてあげること、
見守りつづけていけることも、そ
れは「向き合っている」つてこと
になり。

見守るつてことは何もしていな
いと想つていた気持ちの中で、そ
うではなく、他者の気持ちを自身
の気持ちの中へ映しつてあげる
ことが寄り添うことでもあり、向
き合うことに繋がつて行くのかな
あうつて想つてみたのです。

目に見えること・見えるもの、
例えば、生き方・考え方、失敗も、
上手く行つたことも、実は生き方
に「打率（競争）」なんてないん
だと気付いたのです。

スランプ、落ち込みだつて、そ
れは必要だからスランプにもなる
のだらうし、そのつらさに向き合
いなさいつてことかもしれないし、
どうしたい・何をしたいだけが生
き方のすべてではなく、時には休
息も大事なことなんだつてこと。
自身の気持ちに、そのまま寄り
添うことだつて、生きていること
なんだつて。

これで終わりつてことではなく、
これからはじまり、生き方に打
率（競争）は、求められてはいな
いし、打率（競争）だけで評価は
出来ないこともようやくたどり着
いた気付きです。

いつもいつも、なんでもつづけ
て上手く行くことつてないし、連
敗つづきつてことなどもない。

たとえ、連敗したつて、それは
人生を負けつづけるつてことでは
なく、必ずその中にも何かの機会
（きつかけ）や踏ん張れること、
小さな微笑（ほほえみ）もあるだ
らうし、失敗（しくじり）がある
から他者のこころの痛みに気付け
るのでは。

小さな弱いところが新たな気づ
きを生んでくれることに、繋がつ
ていくのだと想うのです。

これからの道程（みちのり）を
考えると何時だつて、それからの
ことが遠く感じるけれど、過ぎ去
つた一瞬からはいつだつて小さく
なつてみえる。

すぎさつたことは、あつと云う
間のことだつて、時がたれば経つ
ほど想う。

だからいつも前を向いて一歩で
も半歩でも、いやいやたとえ一ミ
リだつて前進は前進なんだなあう
つて想う。

その一ミリ、つらいなあつて想
つた一ミリだつて過ぎ去ればあつ
と云う間のこと。



今年が半分終わる日の6月30日新大阪から小倉に行った。社会医療法人共愛会の百周年記念講演会に出席するためだ。18床の病院(当時は病院と称してよかった)から現在の218床の病院になるまでの歩みは、尋常ではなかったと思う。世の中、順調な歩みなんて絶対ないからだ。1912年から2012年まで、とにかく前に進まれてきたのだろう。その4分の1に当たる25年間、いささかの関わりがあったことを、誇りに思えた日であった。

そしてその日の新大阪駅で、改札口に向かって歩いていたら「オカダ センセイ」の声がした。クリーブランドの古い友人、リー・ピクラー教授である。とっさにそこでナニが起きたのか、混乱した。ピクラー教授から日本に来ることを聞いていれば少しは落ち着けたのだが、奇遇とはまさに奇跡的に会うことなのだ。弟さんと観光に来られていたことが分かったころは、通常の気持ちに戻っていたが、待ち合わせても会えないこともあるのに、と思った。

なぜこんなことから始めたかという、その日だけでなくその二三日間は「縁」の意味の深さを痛感し、その縁を大事に生きていくことは、人間にとって重要なことだと思ひ知らされたからだ。

社会医療法人共愛会の理事長の下河邊智久さんとの出会いも、縁

あつてのことだ。パーティのときの県知事さんなど来賓のご挨拶でも語られていたが、下河邊理事長は寡黙なお方だ。とても短い言葉の中に、想いや思いを詰め込まれていると、わたしは感じてきた。それで、四半世紀の関係は十分に築かれてきたのだから、寡黙は決してコミュニケーションを妨げることではない。逆に饒舌はしばしばコミュニケーションを希薄化させるような経験をしなから生きてきた。また、寡黙は縁を濃くするように思う。

縁を大事にしたいと改めて思う — 6月30日の1日の経験から —

それは同時に、医療機関は一人ひとりの患者さんとの縁や地域との縁を大事にすることで、生きていけると思えた。オカルト

ぼくなるが、縁を大事にしている。当日は、某医大の教授から地域住民との関わりを聞いたし、医

師会の会長さんからも、縁を頂いた。単なる偶然の出会いではないと、わたしは思えたのである。

病院の職員(例えば医師)が、患者さんとの出会い(例えば診察)を、仕事として処理してしまうのか、ご縁を感じてコミュニケーションをとっていくか、という話だろう。もちろん、多数の患者さんにならぬという意見はある。ただ、わたしは一人ひとりの患者さんとはご縁を感じたほうがよい医療ができると思っている。

いつ、どこで、なにがあるか 分らないのが人生だと思ふ。

クリーブランドのヘルスケアMBAの教授と新大阪の駅で出会うなんて、確率的にはゼロに近いだろう。だけど、それが起きてくるのが人生だと思ふと、それこそ

“人生、なにがあるか分からない”と実感している。ポストンで、20年ほど前にメイヨクリニックの薬剤部長に声を掛けられたことがあるが、このときには確率としてゼロではないと思つたことを想ひ出している。

しかもその日は、小倉に行く新幹線の乗車券を一本前に繰りあげようと乗車券売り場に歩いていたら、ときだったから、それがなければ教授とは会わなかったわけだ。彼は東京に、わたしは小倉へと別れたのであるが、なんか清々しい想

いがあり、先の百周年記念会での出会いや講演された川原尚行氏(医師)のお話に心を動かされた。

川原尚行氏の活動はスーダンでの医療活動だが、東日本大震災では被災地に入られて、子どもたちの力を借りながら生きる力を湧き出されていると、わたしは感じた。

わたし流のスピリチュアル・ケア観である。世の中には、スゴイ人がいっぱいおられるし、その人との縁を大切に思うのである。

川原氏は、外務省の医務官から転進して活動されておられる人だが、外務省を辞めたときに痛感されたことが「肩書きでの自分」であったと語られていた。生きていく自分ではなく、外務省の医務官という肩書きで接しられてきた自分を突きつけられたと、おっしゃっていた。それも、大事な縁の話だとわたしは思った。

医師や看護師という肩書きで見られている自分なのかもしれないのだ、ということだ。わたしの社会医療研究所所長という肩書きは大したことはないと思つているが、もしかしたら“その肩書き”で見られている自分もいるのではないかとと思うと、人生は怖い。

人間関係については、いささかの勉強をしてきたつもりだが、ご縁も人間関係にとって大事だと思う。ご縁に人生を感じるかという感じがするのである。そういう話は、いままで聞いてきたが6月

30日という日は、まざまざと大事さを突きつけられた一日だった。ウン、そう感じる一日があることこそが縁だと思ふのである。いちいち意識して生きていくわけではないが、それに気がつくことが起きることも縁のように思う。

もつとも、縁には良縁と悪縁がある。しかしわたしは、お人好しのせいか悪縁は今まで感じたことはないし、たぶんだが、わたしは悪縁を悪縁と感じないで生きてきたのかもしれない。縁と運は別なのではなからうか。病気が人を強くすることがあるし、悪縁が良縁に変容することもあろう。ところが運不運は、そうはいかない。

自分が死にたいからといって大阪のミナミで二人も殺してしまうアイツに出会うことがある。死んでも死に切れないという表現があるが、まさにそうだろう。縁とは別に、わたしにも不運がやってくるかもしれない。いままではいくつかの不運は乗り切ってきたが、今後のことは分からない。

わたしは拙著の本のサインに、よく「生きて、生きて、生き抜く」と書く。死は一回きりのものだから、とにかく生き抜いて死にたいという自分自身への言葉でもある。今日は7月2日、これから小倉から熊本に行くが、考えてみればこれもご縁である。天変地異という不運があるかもしれないが、縁を大事にしたいと思つている。岡田

よく「生きて、生きて、生き抜く」と書く。死は一回きりのものだから、とにかく生き抜いて死にたいという自分自身への言葉でもある。今日は7月2日、これから小倉から熊本に行くが、考えてみればこれもご縁である。天変地異という不運があるかもしれないが、縁を大事にしたいと思つている。岡田

しずやしず しずのおだまき
くりかえし むかしをいまに
するよしもなく
ながらうべきや この空蟬を

長生きとはなにか？ ただその人の寿命を生きることにはすぎない。

平均寿命79才を越えて生きていくというのがワカリやすい。だが、数字で納得させられるのは、あまり好きじゃない。

みんな、それぞれの寿命の長さを生きているのだから、生きてることが長生きしてということじゃないのか？

「長生きしてください」「長生きしたもんだ」まあ、それはそれでいい。つまり、長生きとは死なないでいる状態ともいえる。

メディアは「長生きの方法」というテーマが好きだ。といつても、結局は、血圧、血糖値、体温をよく管理し、野菜をとり、よく眠るということにつく。ところが最近、某週刊誌が「長生きしたければ、病院には行くな」というショッキングなタイトルの特集記事を載せていた。早速読んだが、要点は「よく病院へ行って検診を受けていても寿命には変わりはない。それより、常識的に知られてる予防をしてほしい。それから脈拍数が少し上がるくらいの軽い運動を1日30分、週に3回以上やった人の寿命は明らかに長いのだと。」

これややっていけば病院の健康診断などする必要がない、そうなのである。つまり、これは、医者などを頼りにせず、ごく普通に生きればいいという天下の名医の宣告だった。これは、まことにワカリヤスイ長生き法である。おもしろかったのは、X線検査は放射線をあびせられるのだということをおぼろげに覚えていたことだ。一般的に「やった方がいい」といわれることを「やるな」というのはスゴイ。

長生きするということは死なな



病床の心音 (57)

生きてる、生きてる、生きてる

天野進平
(脚本家、要介護度4)

ということだが、そうはいかない。

大震災の時の石巻市のお医者さんのことばが、まだ耳に残っている。「危ない黒レベルだけを診てきたが、結局、3百人の死亡診断書を書いた。師長が、遺体を清めますと言ってきたが、私はこう言った。『ここまで生きてきたままの姿のままご遺族にお渡ししよう。特に医者メスがいらなかったのだから、このお姿のまま』」
もう一人、親友の前立腺ガンの名医の話。この彼に「オマエに

とって死とはなにか」と問うと、シャーシャーと言いやがった。「死は俺の専門外だからワカンない」「この世に生をうけ滅せぬ者のあるべきや」「医者がきどつちやいけないよ。とにかく前立腺ガンは死亡率が高いと聞く。オマエは月に何人殺している?」「月に3人は。しかしたくさん命を助けてきたぞ」「救急車で来ないで、その前に俺の外来に来て欲しいのよ。必ず助ける」「そうか俺もオマエに生かされたんだっけな」「ガンになる前の前立腺を、イヤがるオ

美空ひばりの「ああ、川の流れるように、おだやかにこの身をまかせていたい」も生命賛歌だ。
長生きとなると、家系を問題にする人が多い。わが家系も長生きの家系だ。5人兄弟で長姉は92才。認知症だが熱烈な創価学会員、次の姉が90才。津波・原発避難を拒否。今は市の仮設ホームに強制留中。次は兄で88才。40才でガン、それから入院を続け、今は医療を拒否し、カメラ三昧。次も姉で86才。千葉の山中で生死不明?の一人暮らしで生きてる。次が私だが、余命告知2度、卒中

マヒとメニエルツンポで周りに迷惑をかけて生きてる。
さて、それでどんな奴が長生きしてるかというところ、それは病弱の奴に決まっている。

マエをおさえつけて削った」
どうも、こんなテーマは俗物の私には、重すぎて頭を抱えつばなしたが、そんな今、かの福山雅治の「生きてる、生きてく」という歌がテレビから流れてきた。長生きとはこれなんじゃないかと感じいった。生きてくということばが気に入ったので、この小文のタイトルにも使わせてもらった。てくという進行形がいい。
そもそもは恋の歌だが、ZAR Dの「負けないでもう少し最後まで走り抜けて」というのもある。

テレビに突然「健康寿命89才」という文字が映った。なんのことかと思わずペンを落としたら、それは「ロイヤルゼリー」のCMだった。ハチミツは長寿を約束すると昔から、ね。
「俺はガキの頃、一度歯医者に行つたきりで、医者にかかったことがない」の自慢だった友人が、散歩中に心筋梗塞で倒れ、ホントに文字どおりポックリ死人だ。
それにひきかえ、私は病気の天才で、さきほど入院した病院の数を指折り数えてみたら、14病院も

あった。とにかく、チンタラチンタラ生き永らえている。思えば、小学生の時は小児ゼンソクで5年生まで不登校。毎月、重ねたフットンに寄りかかって、ゼイゼイやっていた。トナリの天理教のオバアチャンがいつも背中をさすつて「タスケタマエ」と祈ってくれていた。
このテーマは、その興味深い「天理教」のユニークな死生観で締めさせてもらう。
とにかく天理教では、決して死んだことを死ぬとは言わない。ナント「出直し」と言うのである。出直しとは読んで字のごとく「この世を出直す」のである。その出直しの方法がおもしろい。体は神様にお返しし、魂は神様のふところへ帰り、そして魂はふたたび神様の思召しにより新しい着物(赤子)を着せてこの世に出してくる。それはどうということかというところ、これがスゴイ。どこかの妊婦のお腹の中の子に移つて、その子の心になるのである。
ということばは、この子になって、またこの世に生き直すワケである。「出直す」とは「生き直す」のだ。だから天国はこの世。
視点を變えると、あなたも実は天理の子なのかもしれないワケだ。オフクロさんに、自分が産まれる時、お腹の具合になにか変わったことがなかったかどうか、たしかめた方がいい。

無理をしない計画

ゴールデンウィークの後半に、屋久島へ出かけた。鹿児島にいたときから行きたかったが、これまでチャンスがなかった。「行くぞ」と決断し、山歩きと雨への備えを

「今」を生きるケア

第83回 山は沈黙している

佐藤 俊一 (淑徳大学)

簡単にした。続いて、鹿児島時代の同僚に紹介してもらった民宿の親父さんに空港からの宿までの送迎を頼み、2日目に予定している「もののけ姫」のイメージとなった「白谷雲水峽」のガイドをお願いした。2泊3日の短い旅のため、

2日目を目いっぱい屋久島の自然を楽しめるように計画した。

屋久島と聞けば、多くの人は樹齢7200年と言われる縄文杉を想い浮かべるだろう。ところが、この時期は、狭い道に人が溢れることが予想された。実際に5月4日がピークで、現地地聞いた記憶では1日で1200人近くだったようだ。さすがに、そんなに人で混雑する中に行く気にはならない。

体面からの心配もあった。この数年はジョギングを続けているとはいえ、やはり自然は怖い。往復で10時間は厳しいと考えた。これも現地へ行ってわかったことだが、朝の4時過ぎには起き、出発の準備をしても、帰りは夕方の6時ごろになるようだった。やはり、今回は避けたことが正解だった。

農家民宿の宿が楽しみだった。ホームページを見ると、自家製野菜と親父さんが素潜りで捕ってきた魚がごちそうになれるようだ。家庭料理を味わい、屋久島の焼酎三岳が飲めるだろう。

こんな諸々の期待をしながら羽田から鹿児島空港経由で、屋久島へ向かった。天気も心配だったが、嬉しいことに3日間とも、素晴らしい青空が続いた。

自然の傍にいる

空港で民宿の親父のIさんに迎えられる。その足で宿までの途中にある「千尋の滝」へ向かった。写

真で見せられないのが残念だが、滝の前にある大きな花崗岩の1枚岩がすごい。時間とともに雨風で削られながらも、広大な1枚の岩が保たれている。自然の厳しさと強さを見たような気がした。

宿に着くと、地元の温泉に連れて行ってもらう。その後は宿の前の海岸まで散歩した。行く道で猿の一家に出会ったが、本当にすぐ傍で生活しているのがわかった。海岸からの帰りには、山々と正面から向き合うことになった。1500m近い山がいくつもあり、山を見て歩いていると、「ああ自然の傍にいるなあ」と思った。そして、都会を離れて、いろいろなことを忘れないと、自然とともにいられないのだと感じた。

この夕暮れに感じた自然の傍にいる感覚が、翌日の「白谷雲水峽」を歩いている途中で、自然の中にいると感じられるようになっていった。それはIさんの疲れを癒す独特なガイドトークと数人で歩きながらの沈黙の時間から生まれた。いつの間にか、私たちは山にある沈黙とともにいた。

山は沈黙している

山を見て、さらに山の中に入ること、沈黙を感じるようになっていった。それは、山が沈黙しているから、忘れていた自分とともにある沈黙を思い出すのである。同時に、私たちの日常が喧騒の中にあるこ

とを明示している。

たとえば、私は大学において日々の仕事に追われ、たくさんのことに対応する。時間を区切つてさまざまな人と会い、話し合いをして物事を進めていく。そのため、ピカート (M.Picard) が問いかける「沈黙」はどこかへ行き、ことを次々とつなぐことで相互理解が可能になると思込んでいる。私に限られたことではないが、多くの人は、沈黙がお互いをつないでいることに気づかず忙しく物事を進めているのである。

相手に何かを伝えよう、わかってもらおうとすると、私たちはことを使って、交渉相手に直接働きかける。それがうまくいかないときかける。それを再度働かせる。そうしたかわりを疑問をもたずに、毎日行っている。しかし、相手に直接働きかける態度は、すでに沈黙を忘れているのだ。必要なことは、「ひとりの人間から直接に相手へ働きかけるのではなく、ひとりの沈黙から相手の沈黙へと働きかけること」(『沈黙の世界』みずす書房/傍点筆者)だとピカートは指摘する。

私たちが忙しく相手と交渉するように、山は前へと進まない。山は動かないのだが、そのことが、私たちに沈黙を想起させる。山々の沈黙が、私たちのなかにある沈黙に働きかけてくることで、沈黙とともにいることが起こる。しか

し、日常においては、この沈黙が見えないことでお互いがわかりあえず、対立することにもなる。

沈黙から沈黙へ話しかける

グループ臨床の研修を行っている、多くのメンバーが沈黙を避けようとする。沈黙は「気まずい、ムダな時間」と考えられている。そのため、何かをして不安を紛らわそうとする。典型的な例が、グループにおいて今話さなくてもいいことを、延々と話し続ける。だが、それに気づいたメンバーも、疑問を投げかけるのを躊躇する。なぜなら、その動きから沈黙が生まれるのを恐れるからだ。

他方で、あるメンバーの態度に疑問を感じ、「相手はなぜそのような考え方をするのか」と問いかけるときがある。そのことは、自分の中からスツと出てきたのではなく、発する前に問があり、沈黙から生まれている。そのことは受け取る相手も、キャッポールのようにことはを直ぐに返すのではなく、沈黙において受けとめていくことがわかる。こうして、沈黙から対話は生まれる。

帰りの屋久島空港に、ゴールデンウィークが終わっても屋久杉を目指す団体客がいた。彼らの話し声から、都会の喧騒が持ち込まれているのがわかった。山が沈黙しているからわかるのだと、このとき私は改めて気づいた。